there+be+NP+ing 構文とthere+be+NP+en 構文について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 家口, 美智子, YAGUCHI, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065809

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

there+be+NP+ing 構文と there+be+NP+en 構文について

家　口　美智子

1. はじめに

there 存在文は場所を表す PP 句を持つ there+be+NP+PP（例：There is a book on the table）の構文がデフォルトの構文として日本の教育現場では紹介されている。そして規範文法では、(1a) のように be 動詞と NP は数が一致すると説明されている。

(1) a. There are three books on the table.
　b. See now, there's a lot of people who will speak to you friendly out on the street...　(BNC, academics)

しかしながら、(1b) のように数の不一致を起こしている文は散見される。Svartvik and Leech（2006: 969）はインフォーマルな英語においては数の不一致はもはや非文であるとは見なされないとしている。つまり、現代英語のインフォーマルな英語では数の不一致はノームとなっている。

一方、there 存在文には (1) のように場所を表す句（PP 句、AdvP 句）が現れるあるいは特にどんな句も現れない場合以外に、以下のような構文がある。[1]

(2) There were a dozen hungry people standing in the rain.　(Quirk et al. 1985: 1409)
(3) There was a gold medal presented by the mayor.　(ibid.)
(4) There is a parcel come.　(ibid.)

[1] AP も可能である（例：There's a lady present. BNC, fiction）が、本稿では頻度が低いため数量的な分析ができないので、考察を行わない。

Quirk et al.（1985: 1409）は（2）の、there 存在文の中に進行を表す動詞の ing 形が現れる構文、(3）の受身を表す他動詞の過去分詞 en 形が現れる構文、(4）の自動詞の過去分詞が使われる構文を紹介している。本論では、それぞれ T-ing 構文（there+be+NP+ing)、T-en 構文（there+be+NP+en)、TP 構文（there+be+NP+pp）と呼ぶ。Yaguchi（2015、2017）は（4）の TP 構文を分析しており、TP 構文は頻度は低いものの、インフォーマルな文脈で使われ、be 動詞と NP の数の一致率が高いため be 動詞が pp と結びつきプロファイルされる構文であると議論している。つまりは、be が助動詞として機能していると議論している。(2）や（3）のような構文の使用実態に関しては、筆者の知る限りは、先行研究で取り扱われることはほとんどなく、どのような文脈でどのように使用されているのかは明らかになっていない。本稿は、これら 2 つの T-ing 構文と T-en 構文について、どのような文脈で用いられる構文であるのかを解明する。また、これらの be 動詞が助動詞として ing と en と結びつきプロファイルされる構文であるかどうかについても明らかにする。

2. 背景

「はじめに」で述べた通り、一般の存在文 there+be+NP において、be と NP の数の一致がないことがインフォーマルな会話では一般的になってきている（例：DeWolf 1992、Meechan & Foley 1994、Carter 1999、 Cheshire 1999、Martinez Insua & Martinez 2003、Crawford 2005、Svartvik & Leech 2006: 969、Breivik & Martínez-Insua 2008)。数の不一致が頻繁に起こる現象は、there と be 動詞が融合してきているためであると Breivik and Martínez-Insua（2008）は説明している。Yaguchi（2015、2017）は、there と is が融合した完成形である縮約形 there's に関して、(5）のように let's が particle 化しているのと同様に、there's も particle 化している例があると議論している。

(5) a. Let's you and I take 'em on for a set. [1929, Faulkner, Sartoris III. 186, *OED*]

(Hopper & Traugott 2003: 10)

b. Let's you go first, then if we have any money left I'll go.

(Hopper & Traugott 2003: 11)

c. Let’s us try it out. (安藤 2005: 882)

（5a、b、c）は全て let’s の構成要素である us の存在が話者に認識されていないことがわかる例である。us が let’s に含まれているにも関わらず、you and I で言い直したり（5a）、you を強調したり（5b）、再度 us を言及している（5c）。つまり、let’s は文法的な品詞の範疇がはっきりとしない particle として機能している。同様に there’s に関しても particle として機能している例を Yaguchi（2015、2017）はあげている。

(6) A: Which of the Scandinavian capitals have you visited?
B: Well, there’s Oslo in Norway. (Breivik 1990: 153)
(7) A: Who’s attending the meeting?
B: Well, there’s (*are) John, Michael, and Janet. (Breivik 1997)
(8) There’s a man wants to see you. (OED)
(9) a. There’s is nothing magical about the 6000 point mark on the Dow.
(COCA news)
b. There’s is still hundreds of thousands of dollars not accounted for.
(COCA spok)

（6）と（7）はいわゆる list 文と呼ばれている構文である。（6）と（7）の B の解答における there’s は文法的に言うと不要であり、また、（7B）のように NP の数に一致させると非文になってしまう。これは there’s がリストをあげる際に、ディスコースマーカー的に particle として機能する例であろう。また、（8）はいわゆる there 接触節で、本来は there+be+NP+Ø+VP という関係代名詞が省略された構文であるとされる。本稿では TV 構文と呼ぶ。以下で詳しく説明するが、Yaguchi（2015、2017）はこの there’s は let’s 同様 particle として機能し、there 接触節は、there’s+[NP+VP]のような構造を持つ場合があり、この構造を持った文が 20 世紀以降頻度が増加していると議論している。また、Yaguchi（2017）は（9）のような there’s が there の代替として使われている例が散見されるとしている。このように there’s が particle 化したケースは構文によって見られる。

ここで、Yaguchi（2015、2017）の TV 構文についての議論をもう少し具体的に説明する。Yaguchi（2017: 107）によると、TV 構文は近代英語初期には正式な文書にも使われていたが、18 世紀以降はインフォーマルな文脈でのみ使用されるようになったが（cf. Rissanen 1999: 298-299、Ukaji 2003）、一部の文では there's が particle として機能するようになった結果、縮約形 there's が使用される場合に関しては数の不一致の割合が上がると推定されるとしている。Yaguchi（2017: 107）は（4）のような現在完了を表す TP 構文と（8）のような TV 構文に現れる there's の使用率と NP との数の不一致率を比較している。Yaguchi（2017: 107）が Corpus of Historical American English（COHA）のデータを分析した表 1 と表 2 を見られたい。

表 1: COHA における there's の割合と不一致率の変化 (生起数)

		1810s-1840s	1850s-1880s	1890s-1920s	1930s-1960s	1970s-2000s
動詞の内、*there's* が占める割合	TV	47.9% (35/73)	57.7% (56/97)	84.7% (94/111)	71.1% (69/97)	82.1% (23/28)
	TP	33.3% (3/9)	62.0% (13/21)	62.9% (22/35)	23.1% (3/13)	50% (5/10)
there's の NP との数の不一致率	TV	2.9% (1/35)	5.4% (3/56)	20.2% (19/94)	29.0% (20/69)	34.8% (8/23)
	TP	0% (0/3)	0% (0/13)	4.5% (1/22)	0% (0/3)	20% (1/5)

(Yaguchi 2017: 107)

表 2: COHA における一般の存在文における there's の割合の推移 （生起数）

	1810s-1840s	1850s-1880s	1890s-1920s	1930s-1960s	1970s-2000s
一般の存在文の *there*'s [2]	8.2% (16/196)	11.4% (22/193)	12.0% (23/192)	4.1% [3] (8/196)	10.8% (21/194)

(Yaguchi 2017: 100)

[2] Yaguchi（2017: 100）は COHA の 40 年ごとのでデータよりランダムに 200 例抽出しその中で there+has+been 等の例を除外し、数の不一致率を出している。

[3] この 4.1%はかなり低いため、Yaguchi（2017: 100）は他の 200 例を取り出して確認したが、あまり変わらなかったと報告している。

表 1 によると、TV 構文、TP 構文は、動詞は's、is、are、was、were が取れるわけであるが、TV 構文は縮約形 there's が 1810-1840 年代は 50%以下であったが増え続け、1890 年代以降は 80%程度で推移し、数の不一致率が 1800 年代初頭は数パーセントであったものが、1970 年代以降 30%以上まで上がっていた。一方、TP 構文は（生起頻度が高くないので割合を見るときには注意が必要であるものの）縮約形が用いられる率は 50%前後でとどまり増えている傾向は見せていないし、there's と NP の数の不一致率も TV 構文に比べて低い。Yaguchi（2015、2017）の Corpus of Contemporary American English（COCA）の分析では、スピーチのサブコーパスを除いた他の書き言葉を集めたサブコーパスにおける TV 構文と TP 構文のデータでは、there's の使用の割合が、それぞれ 68.1%（47 例中 32）、43.8%（32 例中 14 例）で、数の不一致率は、25.0%（32 例中 19 例）、7.1%（14 例中 1 例）で同様な傾向が見られる。Yaguchi（2015、2017）は、両構文とも会話で主に用いられるインフォーマルな構文である（COHA の 1930 年以降のデータでは、TV 構文では 90.9%、TP 構文は 86.7%が会話で使用されている）のにこういった現象が観察されるのは、there+be+NP+Ø+VP という構文の一部で、there's が particle とし機能し[there's]+[NP+VP]という構造を持つ文の存在を仮定しないと説明がつかないと議論している。また、（10）の例は、Yaguchi（2015、2017）により提示されている。

(10) a. “Who to?” “Why, there's people'll buy anything,” said the Patron.

[1954, John Steinbeck, Sweet Thursday, COHA]

b. “There's something's happened,” he said gravely.

[1949, Roger Phillips Graham, Amazing Stories, COHA]

（10）の TV 構文を持つ文がいずれも there+be+NP+Ø+VP の構造で関係代名詞が省略されているのなら、NP の後に続く助動詞や be 動詞が、people'll や something's のように縮約形として用いられることは起こりえない。

Yaguchi（2015、2017）は、TP 構文は、表 1 での数の不一致率の平均は 4.4%（2/46）で（繰り返すが、上述の COCA のデータでは 7.1%）、表 2 にある一般

的な there 存在文の数の不一致率（9.3% （90/971））より若干低いことにより、T-ing 構文や T-en 構文を表す構文と同じで、be 動詞は NP の後に来る ing/en/pp との結びつきが強いため、NP と be 動詞との数を一致させる傾向の強い、be 動詞がプロファイルされる構文であると議論している。Yaguchi（2015, 2017）はこれら T-ing 構文や T-en 構文が一般の存在文とどう異なるかはふれていない。また、実際に T-ing 構文と T-en 構文は TP 構文と似た構造を取るものの、TP 構文同様に be 動詞と ing/en との結びつきが強いかどうか確認していない。そこで本稿は TP 構文と同様な構造を持つ T-ing 構文と T-en 構文は一般の存在文とは異なる助動詞として機能する be 動詞を持つために be 動詞がプロファイルされ there と be 動詞が融合しにくいという仮説を検証する。つまり、本稿は、T-ing 構文と T-en 構文は TP 構文と同様に一般の存在文より数の不一致率が低い構文であるのかどうかについて分析を行う。また、どんな文脈で使用されているのかを検証する。

本稿は there's の使用はインフォーマルな文脈で使用されるということ、会話は地の文よりインフォーマルなスタイルであることを前提に議論を行う。

3. コーパスとデータの抽出方法

本稿は、British National Corpus（BNC）の fiction のサブコーパスを分析する。Yaguchi（2015、2017）は COHA や COCA を分析しているのでアメリカ英語で統一するという観点からは、COCA のほうが良いと思われるが、コーパスに現れた全トークンの一つ一つの例文の構造を確認する作業を行いたいので、語数の少ない BNC を選んだ。実際、COCA の fiction は 1 億 2,000 万語あるが、BNC の fiction は 1,600 万語である。また、fiction を選んだ理由は、地の文と会話の文があり、どちらの文脈でより頻繁に使用されているかを見ることで、構文の持つフォーマル度を見ることができるからである。

T-ing 構文と T-en 構文を抽出するのに、それぞれ{there _vb * _v?g} と{there _vb * _v?n}で検索をかけた。be 動詞と ing 形と en 形の間（*）に 5 語まで入る文を抽出した。直観としては、6 語以上の方がフォーマルな文脈で使用される可能性は高いと思われるが、ノイズがたくさん入り分析が煩雑になるために、5 語

までとした。T-en 構文に関して（11a）の例文のように called や named で使われているケースは there+be+[NP+called+NP]という構造が there 存在文の受身の構造ではないため分析から除外した。（11b）のようにコンマで現在分詞や過去分詞が区切られているものも分析の対象から外した。

(11) a. There was a man called Shylock in his play *The Merchant of Venice*.
b. There were several alarms, bringing laughing giggles of relief when they came to nothing.

その結果、T-ing 構文は 1,078 例、T-en 構文は 599 例抽出できた。

一般の存在文は、{there _vb}という検索で 200 例をランダムに取り出した。200 例の内、192 例が存在文であった。その内、12 例が T-ing 構文、5 例が T-en 構文だったのでこれらを除くと、結局 175 例が一般的な存在文であった。これらを分析の対象にする。その中の 42 例、すなわち 24.0%は be 動詞と前置詞句あるいはピリオドやコンマで there 存在文が終わるまでの間に 6 語以上の語が来ている。5 語までの例文の場合、会話と地の文は、1 : 0.99（67 例対 66 例）、6 語以上の場合は 1 : 1.3（18 例対 24 例）で、やはり NP は短い方が会話で用いられることが若干多いが大きな差はない。このことを念頭において分析を行う。一方、T-ing 構文（12 例）と T-en 構文（5 例）の 17 例全てが、挿入される NP が 5 語以内の長さを持っていたことは注目すべきことである。さらに、T-ing 構文 12 例中、会話と地の文でそれぞれ 6 例ずつ使われ、T-en 構文の 5 例中、会話で 1 例、地の文で 4 例が地の文で使われていた。縮約形は前者は 12 例中 2 例、後者が 5 例中 1 例のみ使用されていた。これら 3 例は全て会話で用いられていた。200 例をランダムに抽出した中での結果であるが、両構文とも長い NP が用いられることは少ないことが想定される。

4. 結果と考察

表 3 は一般の存在文、T-ing 構文、T-en 構文の be 動詞の割合を表している。一般の存在文は上にあげた 175 例の内訳である。

表 3：BNC の fiction に現れた 3 種類の存在文

	一般の存在文 (175 例)	T-ing 構文 (1,078 例)	T-en 構文 (599 例)
’s	16.0% (28/175)	22.5% (243/1,078)	18.4% (110/599)
is	10.3% (18/175)	4.2% (45/1,078)	7.2% (43/599)
are	5.1% (9/175)	8.3% (90/1,078)	4.7% (28/599)
was	52.6% (92/175)	38.8% (418/1,078)	47.4% (284/599)
were	16.6% (29/175)	26.2% (282/1,078)	22.3% (134/599)

まず、総数から見ていく。T-ing 構文（1,078 例）のほうが T-en 構文（599 例）より 2 倍ほどの頻度で用いられている。上述のようにランダムに取り出した there+be の 200 例では、それぞれ 12 例、5 例だったように、表 3 のデータでも T-ing 構文の方がより頻繁に用いられていることが確認できる。

インフォーマル度を表す縮約形 there’s の比率は、T-ing 構文、T-en 構文とも一般の存在文より若干高い。有意差は一般の存在文と T-ing 構文にはある（χ^2=13.65、p<.05）が、一般の存在文と T-en 構文にはない（χ^2=3.72、p>.05）。これら 2 つの構文の縮約形の使用比率が若干高い理由として、3 節で見たように、一般の存在文の場合は NP の語数に関して制限をかけていないが、T-ing 構文と T-en 構文は挿入された語は 5 語までに制限しているのでよりフォーマルな文脈で使われた例が抽出できていないため、表 3 において there’s の使用率は実際のデータよりは多い割合になっている可能性が想定できる。しかしながら、200 例をランダムに取り出した場合の T-ing 構文 12 例、T-en 構文 5 例の NP が全て 5 語以下だったことを考えると、抽出できなかった例は多くはないと考えられる。これら 3 つの構文の there’s の使用率が 20%前後であることと比較すると、TP 構文は上述のとおり there’s の使用率は 50%弱であることより、インフォーマルな文脈で使われることが更に多いと言える。

また、現在時制と過去時制で用いられる比率を見てみると、一般の存在文、T-ing 構文、T-en 構文の現在時制で用いられる割合は、それぞれ 31.4%（55/175 例）、35.1%（378/1,078 例）、30.2%（181/599 例）で、あまり差はない。若干 T-ing 構文が高い結果となったが、縮約形の使用が少し高いためであろう。

次に各動詞形でどれだけ会話と地の文に使われているかを見てみる。会話と地の文という客観的なカテゴリーでそれぞれの構文がどれだけインフォーマルな文脈で使われているのかを検証する。地の文で語り手が I や we である場合はナレーターが物語の進行を務めているので、会話であるとみなして分析を行った。一般の存在文は縮約形に関しては 200 個の例文をランダムに取り出し、その他の動詞形は 100 個ずつランダムに抽出した。これは表 3 で取り出した一般の全存在文 175 例で比率を出しても良いのだが、サンプル数を上げることで精度を高めることができるためである。それぞれの動詞形で there 存在文でない例文と T-ing 構文と T-en 構文の例文を差し引いて割合を出している。

まず、地の文の全体に対する生起数の割合を見る。ここでは、一般の存在文は上述の 175 例で割合を出している。T-ing 構文は 50.5%（544/1078 例）で、T-en 構文は 53.6%（321/599 例）であった。一般の存在文に関しては、51.4%（90/175 例）となり、あまり差はないことがわかった。ここでも少しだけだが、T-ing 構文は地の文での使用率が一番低かった。上で見た縮約形の使用の多さとを合わせて考えると、T-ing 構文はインフォーマルな文脈で使用されることが若干多いと言えよう。表 4 は動詞形ごとの地の文で使われる割合である。

表 4: 地の文で使われる割合

	一般の存在文	T-ing 構文	T-en 構文
’s	1.7% (3/181)	1.2% (3/243)	3.6% (4/110)
is	16.3% (16/98)	20.0% (9/45)	11.6% (5/43)
are	16.5% (16/97)	14.4% (13/90)	14.3% (4/28)
was	67.0% (65/97)	72.5% (303/418)	72.2% (203/284)
were	65.2% (58/89)	76.6% (216/282)	78.4% (105/134)

3 つのグループとも似たような分布を示している。地の文というフォーマルな文脈で使われる縮約形の使用が 3 つのグループで数パーセントである。逆に言えば、T-ing 構文と T-en 構文の縮約形が会話で用いられる割合はほぼ一般の存在文と同じで 100%に近い割合で会話で使われている。また 2 つの構文は、過去

を表す there was と there were で地の文で用いられることが一般の存在文に比べて多い。表 4 の there was と there were の平均はそれぞれ 66.1%、74.6%、75.3%と地の文で使われている。表 3 にある過去時制で用いられる頻度を考慮した分析を行うなら（表 3 でそれぞれ過去時制で使われる頻度は 69.2%、65.0%、69.7%であるので）、T-en 構文が他より過去時制で用いられることが多いと言える。

一方、TP 構文との比較をすると、Yaguchi（2015、2017）の COHA の 1930 年以降のデータの TP 構文の会話で使用される割合は 86.7%であると示しているが、TP 構文に比べて 2 つの構文は使用の様子が極めて一般の存在文に近いということが言える。TP 構文は be+pp という現在完了の形が現代英語ではインフォーマルな vernacular でしか用いられないことが関係していると推測できる。つまりは、かなりくだけた構文であると言えるため、会話で使用されることが高い確率でノームとなっているのであろう。

次に数の不一致率を見てみる。会話に現れた例だけを取り出し、その中での数の不一致率を算出した。会話だけを取り出すことによって、2 つの当該構文を抽出するにあたって挿入された句が 5 語までに限定して抽出した影響がより小さくなると考えられる。

表 5：会話の例における数の不一致率

	一般の存在文	T-ing 構文	T-en 構文
’s	11.2% (20/178)	12.5% (30/240)	3.8% (4/106)
is	0.0% (0/82)	0.0% (0/36)	0.0% (0/39)
are	0.0% (0/81)	0.0% (0/77)	0.0% (0/24)
was	6.5% (2/32)	0.9% (1/113)	2.5% (2/81)
were	0.0% (0/31)	0.0% (0/66)	0.0% (0/29)

表 5 のデータから数の不一致率に関して 2 点明らかになった。一般の存在文と T-ing 構文の縮約形を比較したところ、T-ing 構文の方が若干不一致率は高いがほとんど差はない。χ二乗検定を行っても有意差は出なかった（$\chi^2 = 0.16$、$p > .05$）。

there was も同様である（χ^2= 3.54、p>.05）。一方、一般の存在文に比べて縮約形では T-en 構文は数の不一致率がかなり低い構文であることがわかる。有意差は出ている（χ^2=4.76、p<.05）。しかしながら there was に関しては、有意差はなかった（χ^2= 0.96、p>.05）。他の動詞形は会話でも数は一致している。

本節における分析の結果から言えることは、T-ing 構文に関しては、縮約形の使用比率が一般の存在文より若干高いが、現在時制・過去時制の使用の割合、縮約形の会話と地の文での使用のされ方、会話における数の不一致率に一般の存在文とあまり差がないことがわかった。不一致率は一般の存在文とほぼ同じということは、there+be+NP+ing において、be と現在分詞の結びつきは一般の存在文とあまり変わらないことがわかった。

一方、T-en 構文は、一般の存在文と比較して、T-ing 構文同様、短縮形の使用比率、会話と地の文での使用率はあまり変わらないが、T-en 構文の縮約形と NP の数の不一致は極めて低いことはどう考えるべきだろう。表 5 のデータで複数の NP に使用される are が頻繁に選ばれているかと言えば、他の 2 つの構文と比べてそうではない（現在時制の there's、there is、there are の合計数の内、there are の比率は T-en 構文はほぼ 15.5%であるが、一般の存在文と T-ing 構文はそれぞれ 16.4%、23.8%とである）。これにより複数の NP が多数使用されているわけでないことが言える。よって数の不一致率が低い理由は NP が単数である割合が高いためであると考えられる。Biber et al.（1999: 291）によれば、レジスターがフォーマルになればなるほど、単数形の NP の使用頻度は下がると示されている。逆に言えば、レジスターがインフォーマルになればなるほど単数形の NP が頻繁に用いられる。しかしながら、単数形の NP がたくさん用いられている T-en 構文が一般の存在文や T-ing 構文より会話等のインフォーマルな文脈で頻繁に用いられやすいと言えないことは、今までの議論で明らかである。では、この現象は何によって生じているのかという点であるが、一つ考えられる要因は、NP が不可算名詞であることが多いため数の不一致率が低くなるということである。T-en 構文の there's の 106 例の内 72 例（67.9%）が不可算名詞であるのに、T-ing 構文の there's の 240 例の内 40 例（16.7%）が不可算名詞であることは、

NP が動作主（agent）である T-ing 構文と NP が被動作主（patient）である T-en 構文と関係があろう。当然、動作主は生物性があるので数えられる指示物が使われることが多くなる一方で、被動作主は生物性とは関係がないため、不可算名詞になることが多くなるのであろう。不可算名詞は単数形であるため、there's とは数の一致をする。よって、T-en 構文は数の不一致率が低いからと言って、be 動詞が助動詞としてプロファイルされている構文ではないと言える。

余談になるが、TP 構文が数の不一致率が低い要因としては、先に述べた Biber et al.（1999: 291）の、フォーマルなテキストでは、単数形の名詞の使用頻度は下がり、インフォーマルなテキストでは単数形の名詞の使用頻度は上がるという主張のとおり、単数形の NP がたくさん用いられていることにあろう。be+pp という形の現在完了は vernacular でしか用いられない（前述のとおり、会話で使用される率も 86.7%と非常に高いし、there's の占める割合もほぼ 50%と極めて高い）が、単数形の NP がたくさん用いられているため、数の不一致率は低いと考えられる。実際、COHA のデータでは、現在時制の there's、there is、there are の合計の総数における there are の割合は 6.0%（4/67 例）であり、単数の NP が頻繁に使用されている。よって、数の不一致率が低いからと言って、be 動詞と pp との結びつきが一般の存在文より強いと主張することはできないことがわかった。同時に、T-ing 構文や T-en 構文が be 動詞と pp の結びつきが一般の存在文より強いという結果は得られなかったため、本稿が立てた仮説及び Yaguchi（2015、2017）の説明は正しくないということが判明した。数の不一致率だけで、be 動詞と ing/en/pp の結びつきを論ずることはできない。

5. T-ing 構文、T-en 構文の構造

本稿が立てた仮説は、T-ing 構文や T-en 構文は、それぞれ there 存在文の進行形、受身形であるという前提に基づいたものであった。それは、進行形だから、受身形だからこそ NP+be+ing/en の構造がしっかりわかるように there に続く be 動詞が ing や en と結びつくためプロファイルされて、NP と数の一致をしていると筆者は考えた。Quirk et al.（1985: 1409）は以下のように進行形と受身形の

別の構造をしている文を variant であるかのようにあいまいに説明している。(2) と（3）はそれぞれ（12a)、（13a）として再掲している。

(12) a. There were a dozen hungry people standing in the rain.
b. There were standing a dozen hungry people in the rain.
(13) a. There was a gold medal presented (to the winner) by the mayor.
b. There was presented (to the winner) by the mayor a gold medal.

以上すべて Quirk et al. (1985: 1409)

Quirk et al.（1985: 1409）によると、（12b)、（13b）は（12a)、（13a）より頻度が少ないと説明されているがそれ以上の記述はない。

一方、安藤（1996: 23）は、存在文は小節の構造（[$_{sc}$NP XP]]）を取っていると主張している。

(14) a. There's [a typewriter on the desk].
b. There's [somebody waiting in the hall].
c. There was [no one in sight].
d. There are [three pigs loose].
e. There's [a book gone from my desk].

以上、安藤（1996: 23）

安藤（1996: 23）は（14）にあるように、NP 以下の部分はすべての存在文で小節の構造を取ると主張している。（14b）は T-ing 構文、（14e）は TP 構文であるが、T-en 構文の例はあがっていない。（14a）にあるように教育現場でデフォルトの構文とされる PP が使われる場合も小節の構造を取っていると仮定されているように、T-en 構文も同様に小節の構文を取っていると仮定される。4 節での結果を見る限り、T-ing 構文に関して、be 動詞と NP との数の不一致状況が一般の存在文とあまり変わらないこと、T-en 構文に関しては単数の不可算名詞が NP として頻繁に使用されているために数の一致率が高い状況を見ると、（12）

（13）で見た、T-ing 構文や T-en 構文がそれぞれ存在文における進行形、受動形の variant であるという考え方は支持できない。

6. まとめ

以上の BNC の fiction というジャンルにおけるテキストの分析結果より、T-ing 構文は、縮約形の使用率が若干一般の存在文より高いが、ほぼ一般の存在文と同じような文脈で用いられ、be 動詞と NP の結びつきも同じレベルであることがわかった。一方、T-en 構文も T-ing 構文と同様な文脈での使用のされ方をしているが、縮約形に関しては、NP が不可算名詞が用いられることが多いことから数の不一致率は低くなる傾向があることがわかった。本論が立てた、there+be+NP+ing/en/pp 構文は一般の存在文に比べて be 動詞と ing/en/pp の結びつきが強いため助動詞としての be 動詞がプロファイルされる構文であるという仮説は間違っていることが明らかになった。

＊本稿の成果の一部は科学研究費（基盤研究費(C) : 課題番号 18K00672）の助成によるものである。

（金沢大学国際基幹教育院外国語教育系）

使用コーパス

British National Corpus (BNC) https://www.english-corpora.org/bnc/
2018 年 11 月アクセス

参考文献

安藤貞雄. (1996) 『英語学の視点』東京：開拓社.

安藤貞雄. (2005) 『現代英文法講義』東京：開拓社.

Breivik, Leiv Egil. (1990) *Existential* there*: A Synchronic and Diachronic Study*, 2nd edition. Oslo: Novus Press.

Breivik, Leiv Egil. (1997) “There in Space and Time.” In Heinrich Ramisch & Kenneth Wynne (eds.), *Language in Time and Space: Studiesin Honour of Wolfgang Viereck on the Occasion of his 60th Birthday*, 32–45. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Breivik, Leiv Egil & Ana E. Martínez-Insua. (2008) “Grammaticalization, Subjectification and Non-concord in English Existential Sentences.” *English Studies* 89 (3): 351-362.

Carter, Ronald. (1999) “Standard Grammars, Spoken Grammars: Some Educational Implications.” In Tony Bex & Richard Watts (eds.), *Standard English: The Widening Debate*, 149-168. London: Longman.

Cheshire, Jenny. (1999) “Spoken Standard English.” In Tony Bex & Richard Watts (eds.), *Standard English*: *The Widening Debate*, 129-148. London: Longman.

Crawford, William. J. (2005) “Verb Agreement and Disagreement: A Corpus Investigation of Concord Variation in Existential *there* + *be* Constructions.” *Journal of English Linguistics* 33: 35-61.

DeWolf, Gaelan D. (1992) *Social and Regional Factors in Canadian English*. Toronto: Canadian Scholar’s Press.

Hopper, Paul J. & Elizabeth C. Traugott. (2003) *Grammaticalization,* 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Martinez Insua, Ana E. & Ignacio M. Palacios Martinez. (2003) “A Corpus-Based Approach to Non-Concord in Present-day English Existential *There*-Constructions.” *English Studies* 84: 262-283.

Meechan, Marjory & Michele Foley. (1994) “On Resolving Disagreement: Linguistic Theory and Variation – *there’s* Bridges.” *Language Variation and Change* 6(1): 63-85.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, & Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.

Rissanen, Matti. (1999) “Syntax.” In Roger Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*, vol. 3, 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.

Svartvik, Jan & Geoffrey Leech. (2006) *English: One Tongue, Many Voices*. New York: Macmillan Palgrave.

Ukaji, Masatomo. (2003) "Subject Zero Relatives in Early Modern English." In Masatomo Ukaji, Masayuki Ike-Uchi, & Yoshiki Nishimura (eds.), *Current Issues in English Linguistics*, 248-277. Tokyo: Kaitakusha.

Yaguchi, Michiko. (2015) "*There* in *There* Contact Clauses Revisited." *Studies in Modern English* 31: 45-70.

Yaguchi, Michiko. (2017) *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach*. Tokyo: Kaitakusya.

On the *there* + *be* + NP + ing and *there* + *be* + NP + en Constructions

Michiko YAGUCHI

Abstract

This study clarifies how the *there* + *be* + NP + ing (T-ing construction) and *there* + *be* + NP + en (T-en construction) constructions are used in fiction. Its analysis demonstrates that both constructions render similar behaviors to the ordinary existential construction (T construction: e.g. *there* + *be* + NP + PP/Ø/AdP). First, the ratios of occurrences in narration to the total occurrences are on the same level among the three constructions. Second, although the T-ing construction is used slightly more often in the shortened form than the T construction, the ratios of the three constructions appearing in the shortened form vary little. Third, the T-ing construction and the T construction share an almost identical ratio of number disagreement between *there's* and NP, but the T-en construction shows a very low ratio of number disagreement due to frequent use of uncountable nouns as NPs. These facts reject the hypothesis of this study that *be* in the *there* + *be* + NP + ing/en is profiled as auxiliary verb, unlike *be* in the T construction. They rather lend support to the validity of the hypothesis that any existential sentences take a small-clause structure of *there* + *be* + [NP + PP/ing/en/AP/pp/AdP/Ø].